

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

-日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕	252

焼物二話

稲垣正宏

1. 焼付きされた猪口

土籠会では、毎年、初秋に慰安旅行を催すことが恒例となっている。

平成2年度は、倉敷へ行った。午前中に観光をし、美観地区の食堂で昼食を食べた。まだ帰りのバスの出発まで時間があったので、骨董屋を廻ってみた。倉敷の骨董屋は3～4軒あるが、アイビースクエア近くの古い骨董屋で、焼継ぎが施された染付の猪口を6個程ほど見つけたので早速買った。(写真図版1-1-6)

染付の猪口も、1980年代の初めの頃は2千円も出せば18世紀代のものも買えたが、最近は随分値上がりして、よい物は数万円もする。ただ同然だった明治の印判染付品でも数千円もするありさまである。

さすがに焼継ぎ品はキズ物ということで1個400円から700円の安値で買えた。これらの猪口については、買った当初から興味深い特徴を有するものがあったため今回報告することにした。

また、(7)については、平成6年初夏、出張先の松江の骨董屋で見つけた物であるので合わせて報告したい。

(1)は、伊万里染付の薄手の猪口で、口径7.4cm、器高5.2cm、底径5.0cmで、疊付のみ露胎である。底部外面に赤絵で「長五者ん(長五番)」の字を書く。

(2)は、ほぼ同じ形態の猪口で、口径6.9cm、器高5.4cm、底径5.4cm、疊付のみ露胎で砂が少々付着している。

(3)は、伊万里染付の猪口で「そば猪口」形をしておりやや厚手である。口径7.7cm、器高6.0cm、底径5.9cmで、底部に蛇ノ目状釉剥ぎ部分に赤絵の顔料が一部もやもやと付着していることから、何か字が書いてあった跡かもしれない。

(4)は、口径5.2cm、器高6.2cm、底径3.9cm、疊付は露胎の伊万里染付の猪口で底部内面には五弁花の文様がつく。また、底部外面には、鉛ガラスの粉を水で溶かして書いた細い文字があり「ル二九」と読める。

(5)は、口径が輪花状になった伊万里染付の小型の猪口で、口径6.6cm、器高5.0cm、底径3.7cm、疊付は露胎。やや厚手で、底部には赤絵で「大三つ」と書かれている。

以上の5点は、大橋康二氏の編年によると18世紀末から幕末期のものである。⁽¹⁾

(6)も、同骨董屋で買ったものであるが、前5者とは明らかに趣が異なる。口径9.0cm、器高6.7cm、底径4.3cmで疊付は露胎である。染付の顔料はベロ藍とよばれる合成呉須で、文様も型紙摺とよばれる一種の印刷法によりおこなわれる。この技法は、明治10年頃から大正にかけて流行した。この時期は、全国各地で磁器が造られたため産地は不明である。

(7)は、伊万里染付の猪口である。口径8.7cm、器高6.2cm、底径5.3cmで薄手である。年代感(1)～(5)と同じで、底部外面に赤絵の顔料が付着しているのは、文字の書かれていた痕跡かも知れない。

焼継ぎは、寛政年間(1789～1800年)から江戸や京阪を中心に流行しはじめた補修技法で白玉という粉状の鉛ガラスを水で溶かして割れ目に塗り、くっつけて小さな窯で焼くと白玉が溶けてぴったりとつながるとい(2)ものである。

上述の7点から言えることは、焼継ぎが盛行した江戸時代末期のものが多いが、明治の形紙摺のものもあり焼継ぎが明治期にも行なわれていたことがわかる。また1、4、5は底部外面に文字が書かれている。1、4は数脚揃の器に付けられた認識番号の可能性もあるが、5は白玉で書かれたガラス化した文字で、これらは焼継ぎ師が残したものに間違いないと考えられる。

2. 森コレクションの赤絵碗から考えられること

伊香郡高月町在住の森氏の邸宅は旧家ということもあって多くの陶磁器が伝えられている。それらの多くは、19世紀前半に盛んに作られた豪華な金襴手の伊万里赤絵磁器が多い。これらは同一の意匠を持つ何組もの碗皿からなる(3)。(写真図版2)

試みに、見込みに花文を有する赤絵染付磁器の寸法を測って分類してみると、口径が28cm、26cm、23cmの鉢(これは1個ずつ)、口径20.7cmの皿、口径14.5cm、深さ4.5cmの深皿(5)、口径11cmの小皿、口径10.7cm器高6.0cmの碗(4)、口径8.2cm器高6.0cmの猪口(3)、口径6.0cm器高4.5cmの小猪口(2)の9器種からなる(碗・皿は20脚ぞろい)。これらの製品に共通する点として、染付部分を金彩で縁取っていることが挙げられる。この漆芸でいう「存星」のような技法は一見したとき大変目立つ点であると言える。

それらに混じって単一で存在する赤絵蓋付碗(1)の年代感(1)は18世紀後半と考えられる。その染付を縁取るように施された「存星」技法が特徴的であるが、碗一客しか遺存していない。

また、もう1種象のような動物を描く碗、皿も数枚遺存しており、これらは((3)～(5))より時代はやや新しい。コレクションの中には、3種の食器セットがあるわけだが、その中で最も遺存率の高い赤絵磁器セットが((3)～(5))明治16年の箱書きを有する箱に納められているのは、何を物語っているのだろうか。もしかすると明治16年の段階で骨董品として購入した物かもしれない。

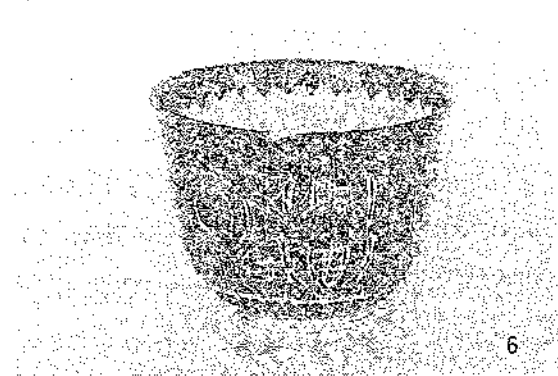
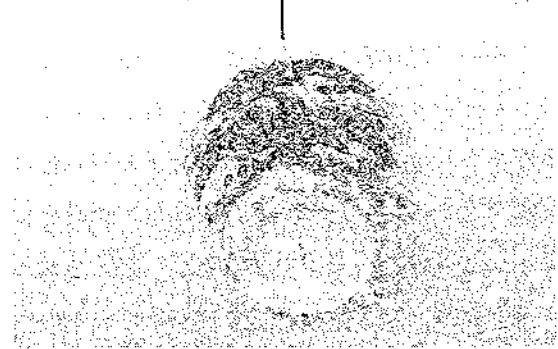
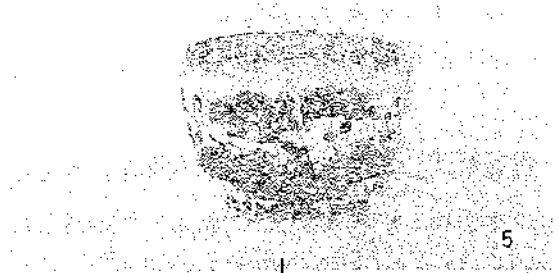
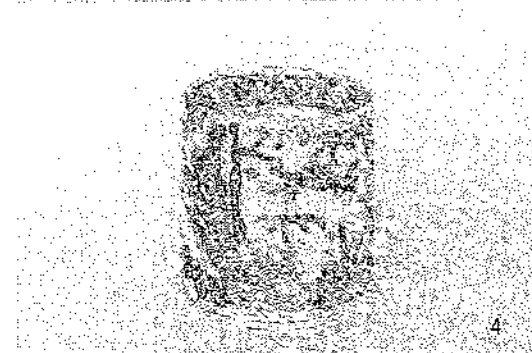
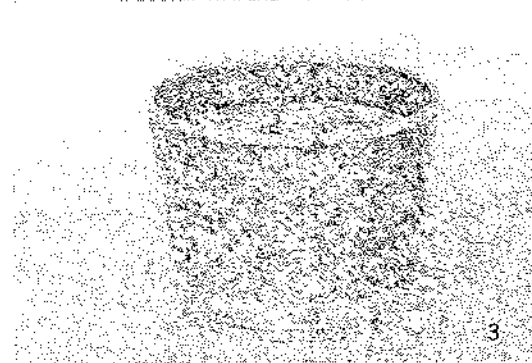
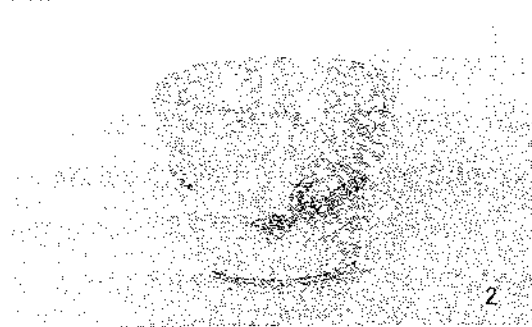
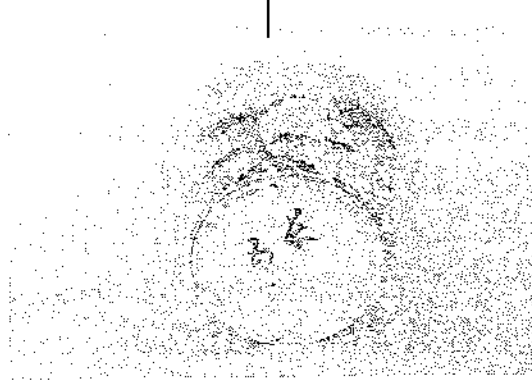
本小論を書くにあたり、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に御教示を頂いた、記して謝意を表したい。

註

(1) 大橋康二「肥前磁器の編纂図」(『別冊太陽—古伊万里—』平凡社 昭和63年)

(2) 喜多川季荘『類聚近世風俗志 原名守貞漫稿』(名著刊行会 1979年)

(3) この箱は、明治16年の箱書きを有する。

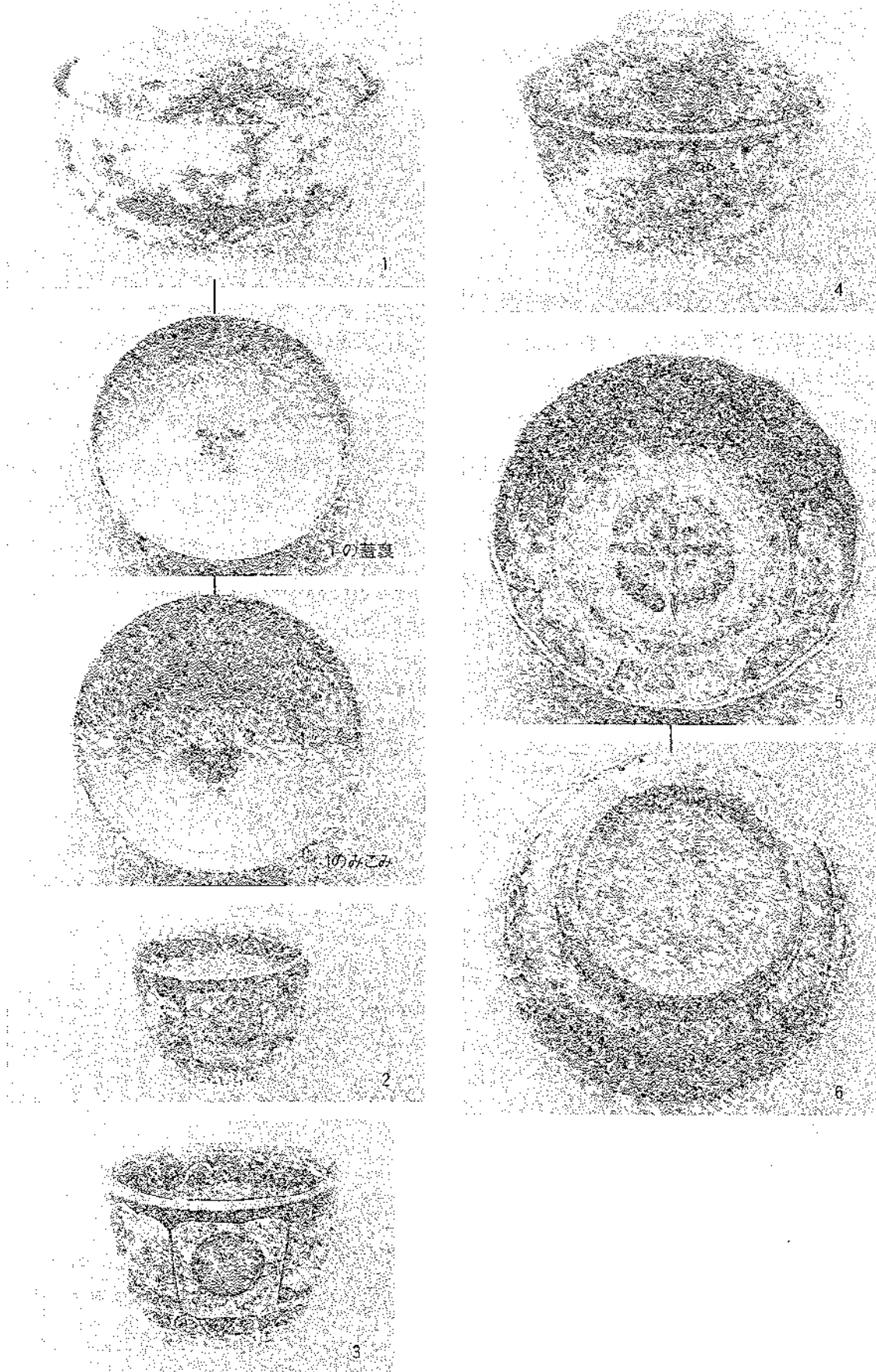


1～5 伊万里染付猪口（江戸時代）

6 伊万里染付猪口（明治時代）

7 伊万里染付猪口（江戸時代）
※松江で購入

写真図版1 焼付ぎされた伊万里染付



写真図版2 森コレクションの伊万里赤絵

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668